

# 子どもの居場所の展開とその機能について

— 千葉市における「こどもカフェ」の事例から —

田村 光子

## Considering Some Functions of Children's Space in Community —A Case of “Kodomo-Café” in Chiba city

TAMURA Mitsuko

近年、子どもの居場所の必要性について多くの場で議論がなされている。筆者は、千葉市において「子どもの居場所」モデル事業の展開に関わり、実践過程を通して子どもを取り巻く課題について認識しながら進めながら、子どもの居場所の機能について検討を重ねてきた。本稿では、近年の展開を加えてその過程について振り返るとともに、子どもの居場所の機能について更なる検討を深めることを目的とする。

キーワード：子ども、居場所、地域、公共空間、福祉

### 1 はじめに

近年、地域における子どもの居場所の必要性について多くの場で議論がなされるようになった。2007年のユニセフにより、日本の「子どもの孤独感」の高さが指摘され、2009年以降には日本の「子どもの貧困率」の高さ、また同じ頃から夏休み明けの「子どもの自殺率」の高さが指摘されるようになるなど、さまざまな面で「子どもの生きづらさ」が社会的に認識されるようになってきた。筆者は千葉市において2011年度より「子どもの居場所」モデル事業の展開に関わり、アドバイザーを務めてきた。取り組み始めた頃は、「公園で子どもたちが群れになって遊ぶ姿が見られなくなった」ことが筆者の関心事であったが、実践過程を経る中で前記にあるような様々な子どもを取り巻く課題が浮き彫りになり、子どものSOS支援の場としての子どもの居場所づくりが近年の方向性となっている。

筆者は2011年から千葉市において子どもの居場所「こどもカフェ」の展開に協力しており、その取り組みや展開過程から、子どもの居場所の機能について検討を重ねてきた。本稿では、さらなる展開とともに現在指摘されている問題について、子どもの生きづらさの背景にある課題について検討を深めるこ

とを目的とする。

### 2 子どもの居場所の展開とその過程

#### 2.1 千葉市における子どもの居場所のはじまり

千葉市では、2010年4月から5年間における次世代育成支援行動計画・後期計画（以下、千葉市後期計画と示す）において「子ども参画の推進」の視点を計画に反映した取り組みを展開しており、その一環として、「こどもの力（ちから）フォーラム」「こどもの力（ちから）ワークショップ」の開催や「こどものまちCBT」「子ども大学」等の運営援助等様々な取り組みにより、子ども参画の場の創出と子ども参画のための子ども育成の取り組みを実施してきた。フォーラムやワークショップを通して、子どもたちが「親や教師でない信頼できる大人が居る身近な相談場所を欲している」ことや「信頼できる大人との間に、付かず離れずの距離感の中で、肝心なときには直ぐに接することができる関係性を求めている」ことが明らかとなった。そこで子どもたちが求めている「信頼できる大人」に求められるスキル（職能）や人材の育成・登用方法について検討し、子どもの身近な居場所にそうした大人を配置できる体制を検討するために、「こどもに信頼される大人

がいる居場所」のモデル事業として「こどもカフェ」が展開されることになった。

千葉市後期計画における「こどもカフェ」の構想では、「既存の公の施設や、自治会館、空き店舗等を活用し、こどもが誰でも使える空間として整備」し、そこには、「子どもに信頼される大人が配置され、地域のボランティアや学生と一緒に子どもたちを見守る」とされている。また、所属に関係なく「子どもたちの居心地の良い自由な場所」を「地域との協働により運営」することを目指すとされている。千葉市は児童館がなく、そのセンター的機能を担うための「こども交流館」が1か所設置されている。「身近に歩いていけるこどものための空間がほしい」という子どもたちの声も反映し、千葉市所有のコミュニティセンター交流スペースを使用し、モデル的な場としての「こどもカフェ」の展開が始まった。

## 2.2 実践過程で見てきた「居場所」の役割

### 2.2.1 大人・社会のルールや枠組みとの葛藤

「こどもカフェ」を展開しはじめた当初、子どもの窓に描いた「自由だよ」の落書きに、こうした居場所の役割を感じていた。

一方で、その当時に運営面で課題としてあげられる話題には「子どもたちをどう管理するか」という視点が強かった。

「こどもを注意する場面が少なすぎる。(ごはんに集中していない。なかなか帰らない。)どこまで厳

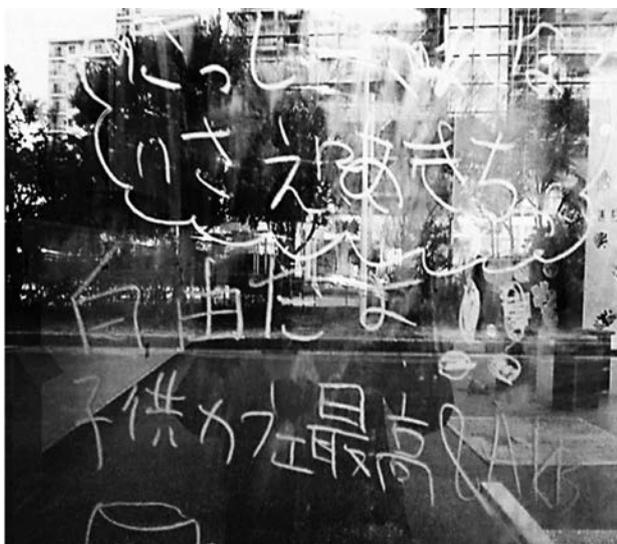


図1 こどもカフェの窓に「自由だよ」の落書き

しくするか線引きをもっとしっかりしたほうがいい。」「話を聞く役割、注意する役割など、大人が役割分担をきめてのぞむべき。」

これは、ボランティアの学生から出た意見である。筆者は、学生の方が「もっと自由に！」と求めるものではないのだということに驚いた出来事でもあった。

「こどもカフェ」は「自由」であることを大切にしながら展開する子どもの居場所である。子どもたちは、「自由」の一方で、わがままやマナーのない行動も多くみられるのも実情である。大人の見えない隙に無断で飲み物を盗って隠れて飲むなど、一般的には盗みとなる行為もみられ、毅然と対応する場面もあった。だからこそ「子どもの居場所」の展開は、子どもだけではなく、学生や大人、そしてその地域が鍛えられる場である。

実際にそれを感じたのが、隣室にある「子どもルーム」(千葉市における児童健全育成事業)との調整である。

子どもから「ルームの時に、チョークで落書きしないように注意された」と子どもから訴えがあがった。「こどもカフェ」では、ロウ石遊びの模倣で、チョークで地面に絵をかくて子どもたちが遊んでいた。その残映が残っていたのである。子どもらしい遊びの残映として筆者は楽しく捉えていたが、「なぜカフェではやってよくて、ルームではだめなのか」などの問い合わせが上がったという。制度や施策としてのサービスの展開と、制度や施策の限界点やすき間を補うような居場所の展開がぶつかり合う瞬間である。「子どもルーム」とは、活動内容の違いがあることを、千葉市を中心に調整してもらうことになった。またルームの活動に響かないように、描いたものを水で消すことを恒例の遊びとした。子どもたちは「注意された」といいながらも、チョークをもって、外で描く姿がみられる。「描いたら消してね」と話すと自分たちで水を用意していた。たしかに調整のない不安定な状況に、子どもたちをさらしてしまったという反省もある。一方で大人社会も一つのルールではなく、さまざまな意見のちがいがあがり、調整していること、それがあたりまえにあることを、子どもたちが察することは、地域の中で育つ醍醐味でもあるように感じる。(上記事例の詳細

細については拙稿「子どもの居場所の機能の検討」(2016)を参照)

近年、大人が形作ってきた子ども観や社会のルールに縛られて、身動きが取れなくなっている子ども・若者の姿をよく目にする。いま子どもたちは、さまざまな不都合や葛藤に出会いにくい、またそうした状況が見えにくい社会の中で育っている。一方で、「子どもの貧困」や「格差社会」など、子ども自身では解決しがたい課題に押し込まれ、身動きができないまま、SOSも発することができず、問題がみえないままになってしまう子どもたちも多い。現代では、不登校や自殺の増加など「子どもの社会への不適応」も大きな問題として指摘されている。こうした子どもたちを取り巻く育成環境の現代的課題についても、地域における「居場所」との関連から見つめなおしていくことが必要である。

### 2.2.2 気になる子どもたちの育ちに寄り添う

「こどもカフェ」を開設して感じたのが、学習面でも難しさを抱える子どもや、特別な配慮や支援が必要な子どもの数が多いことであった。このような子どもたちの土日の居場所、配慮してかかわってくれる大人の存在、誰とでも関われる居場所として、「こどもカフェ」が大きな役割を果たしていたように感じた。

ある中学生から、「部活動をやめたいがどうやってやめたらいいかわからない。悩んでいる」とのこと、学校で先生から呼びだされたけれども逃げていて、休み時間に学校を抜け出してきたとスタッフに打ち明けてくれた。家に帰っても「親に怒られるからむかつく」様子が、いつもならばやらない宿題をもってきてカフェで取り組みだしていた。地域連携のための年1回の運営協議会の際に、所属している中学校の校長先生に事情をお話したところ、「学校としては、学校の他に安心できる場所は家庭と考えていた。部活をやめた子どもたちが流浪するのではなく、見守られる場所にいるということは安心できる」という声を頂いた。学校・家庭のすき間に、立ち寄れる、子どもにとって信頼できる大人がいる居場所の意義を感じた事例である。

感情の不安定な小学校中学年男児。言葉にならない感情を、スタッフに体でぶつけてきたり、人形を

抱きかかえていたり、スタッフを蹴ったり、奇声をあげたりと落ち着かない様子だった。その姿を受けとめながら、特別に扱うのではなく支援しながら、他の子どもたちと関係がもてるように支援を続けた。千葉市を通して、複雑な家庭環境の中で育っていること、そうした中で、自分の中でうまれてくる不安や葛藤を表現しながら、さまざまな人とのかわりの中で解消していく場所として、「こどもカフェ」という居場所が機能していた。(上記事例の詳細については拙稿「子どもの居場所の機能の検討」(2016)を参照)

「こどもカフェ」では、他児においても、すぐにキレやすく、他児に手足が出てしまったり、悪態をつく子どもの姿も多かった。ここはあくまでも、子どもたちみんなの「居場所」でしかない。気になる子どもへの相談や保護するまでの機能は果たせないが、だからこそ、学校と家庭の他にある第三の空間は、「子どもの生きづらさ」を把握しやすい場であるのかもしれない。いま、千葉市では子どものSOSをどう理解し、受けとめるのか、広く市民に呼びかけ研修をしている。「居場所」の理解を広げるだけでなく、地域に暮らす大人たちの子どもを見つめるまなざしが変わることで、少しでも子どもの生きづらさが解消してほしいと願っている。

### 2.2.3 居場所を支えるボランティアの育成

「こどもカフェ」の運営は、スタッフとともに学生ボランティアや地域のボランティアによって支えられている。学生ボランティアのような、子どもたちと大人の間で、子どもたちに慕われる存在は重要な存在である。一方で、若者だからこそ、大人スタッフがよく目をかけて子どもとの関係に注視していく必要もある。子どもたちとじゃれ合って遊ぶことは若者だからこそできる力だが、多年齢が集まる居場所のため、小学校低学年の子どもたちが学生とじゃれ合って遊んでいるのを見て、中学年や高学年の女子が一緒になってじゃれ合う姿が見られることがあった。大人スタッフには見せない子どもらしい姿を受けとめながらも、子ども自身にも学生にも、関わり方にイエローカードを出す役割が大人側に必要である。学生の理解度に合わせて、大人からみてもどのように見えるのかを客観的に伝えると気づきを

持ってくれることが多い。ボランティアに来ている学生たちも、異年齢の子どもたちとの関わりをあまりしてきていない子どもの一人なのだと実感させられる。子どもたちにとっては、先生と生徒、大人と子どもという対立軸にはない存在がいることを大切にしながら見守っていく必要がある。あくまでも子どもの気持ちを大切にしながらも、中学年、高学年の女子には、自分の身体の大切さ、信頼していても周囲に表現してはいけない行動などを、年齢や理解度に応じて説明を加えた。

中学生と学生がSNSを通して繋がり、本人の相談にのっていたりすることもある。学生では抱えきれない問題や、トラブルにならないように関わりについて見守りながら、すぐに介入してやめさせるのではなく、いつでも相談にのりやすいアドバイザーとして見守ってきた。SNSのつながりから、こどもカフェに通っていた子どもが、成長して学生と同じ大学に進学したり、同じサークルに入るなどの様子も見られている。こうした身近な年長者の存在は、子どもにとってわかりやすい成長モデルであり、一昔前ならば容易に得られたものだが、現在の子ども・若者を取り巻く社会の中では貴重な体験となってしまうのが実情なのだ。

地域ボランティアも大切な存在である。折紙名人の男性の高齢者ボランティアが、子どもたちと折紙をつくることを毎回楽しみにして来てくれたりする関わりもみられた。ご本人の楽しみもあつての来所であったが、途中で足が悪くなって通えなくなってしまった時、「今日は折紙のおじさんいないね」という子どもの疑問をスタッフが受けとめて会話する中で、高齢者が関わるさまざまな事情を子ども自身と一緒に受けとめていく経験がみられた。過程に地域の居場所である醍醐味があると感じていた。

子どもに関わる素養についてスタッフが介入しなくてはならないこともあった。「居場所」というすき間だからこそ、さまざまな大人がやってくる。その特性は大切にしながらも、子どもたちへの関わり方についての知識や経験に加えて、大人として子どもに関わる上でのある一定の社会的態度や社会的認識を備えているかどうかも見極めながら、ボランティアを受け容れ、関わる必要が出てくる。さらに、現代の子どもたちを取り巻く複雑な成育環境や

「居場所」の必要性についての認識がないと、子どもたちに教育的・指導的に関わることも出てきてしまう。

そこで、公開講座として「子どもの居場所サポーター養成研修」を千葉市と連携して実施してきた。現在はこれに加えて、さらに専門性を高める研修として「子どもSOS支援員養成講座」を実施してきた（研修については『子どもの居場所の人材育成とスキルアップの仕組みづくりに関する研究』を参照としたい）。公開講座として実施することで、近年の子どもたちの実情を報道などで見て気になっている市民も多く受講してくれている。「居場所」に直接関わるボランティアの育成だけでなく、現代の子どもたちを取り巻くさまざまな課題に理解ある市民を増やしていくこと、子どもたちの成育環境の「すき間」を支えてくれる人材を一人でも生み出していくことは、「居場所」のある地域を醸成する大切な作業である。

### 3 子どもを取り巻く課題

#### 3.1 子どもの主観的福祉の課題

「こどもカフェ」の展開をはかるにあたって、筆者は子どもの主観的福祉の低さに注目してきた。ユニセフによる報告書（2007）では、OECD加盟国の15歳を対象にした調査において、日本の子どもが他の国と比較して持つ疎外感や孤独感が高いことが指摘された。

報告書によれば、本データは「主観的福祉の心理学的及び社会的側面を探索する試みである。例えば、居心地の悪さ、孤独感、『よそ者のような感じ』などで、これらは社会的排除の認識であり、子どもたちの生活の質に重大な影響を及ぼす可能性がある」と指摘している。

子どもの主観的福祉に与える影響について、注目したのが、ベネッセ教育総合研究所（2008, 2013）による放課後時間調査である。そこには、小学生、中学生ともに「忙しい」と感じている子どもが多く、さらに「時間を無駄に過ごしている」と答える子どもが多い結果が示されていた。

千葉市の現状を把握するために、市内の小学校4、5、6年生に協力を得て、放課後の生活についてのアンケート調査を実施した。（2017.2実施 2014～

2016年度科学研究費助成事業（若手研究（B）「コミュニティを基盤にした子どもの公共空間と子ども施策の検討」において実施。植草学園短期大学倫理規定に沿って実施した）その結果、平日の放課後50.9%、土日などの休日についても35.2%が「忙しい」と感じており、上記の結果と同様となった。さらに、平日の放課後および休日に学校以外で過ごす居場所について聞いたところ、平日の放課後に、習い事や塾（53.6%）で過ごす子どもが、近くの公園や空き地（47.0%）を超えていた。土日などの休日においても、習い事や塾（42.3%）に続いて、ショッピングセンター（25.3%）が大きな位置を占めていた。地域の「居場所」が果たす役割は、家・学校のほかにある「第三の居場所」であるが、現代の子どもたちにとっては、その存在が「塾や習い事」へ、さらに土日には公共空間から「ショッピングセンター」へと置き換わっていつている実態が浮かびあがってくる（下記図2参照）。

このことは、子どもたちの放課後において、家庭による教育的な介入や金銭的負担が欠かせないことを明らかにしている。「こどもカフェ」に來所する子どもたちの姿には、平日放課後に「こどもルーム」を利用している子どもたちも多く、土日も総合的スポーツクラブからドロップアウトしてきた子どもの姿もあった。習い事や塾に通っていない子どもたちへの影響、子どもの貧困との関連からも、子どもの生きづらさについて概観することが必要である。

### 3.2 子どもの貧困と居場所の必要性

日本の子どもの貧困率は、13.9%、7人に1人（2015年）が経済的困難にあることが指摘されており、特に「ひとり親家庭」の貧困率が高いことが指摘され、日本のひとり親世帯の就労率が世界的に高いにもかかわらず、社会保障が十分に行き届いていないことも明らかとなっている。

近年、子どもの貧困と居場所の関係について、各自治体において子どもの生活実態調査（実施自治体により異なる名称）が実施され、内閣府より「令和2年度子供の生活状況調査」の分析報告書（2021.12）が示されている。

東京都の実態調査（2017.3）では、小学5年生の放課後過ごす場所として、困窮層、周辺層の子どもは、「公園」「友達の家」「児童館（学童クラブ含む）」で過ごす割合が一般層よりも高い一方、「塾や習い事」で全く過ごさない割合が、一般層（15.5%）に比べ、周辺層（24.7%）、困窮層（41.8%）と優位に高い。さらに、困窮層の子どもは、周辺層や一般層に比較して、週1回以上「ショッピングモール」（22.7%）や「ゲームセンター」（12.0%）で過ごす割合が高いことを指摘している。

さらに、千葉県の実態調査（2020.6）の結果からは、小学5年生の放課後において、「塾・習い事」で全く過ごさない割合が、一般層（23.3%）に比べ、周辺層（39.3%）、困窮層（47.1%）と、東京都と同様に高い結果が示されていた。「ショッピングモー

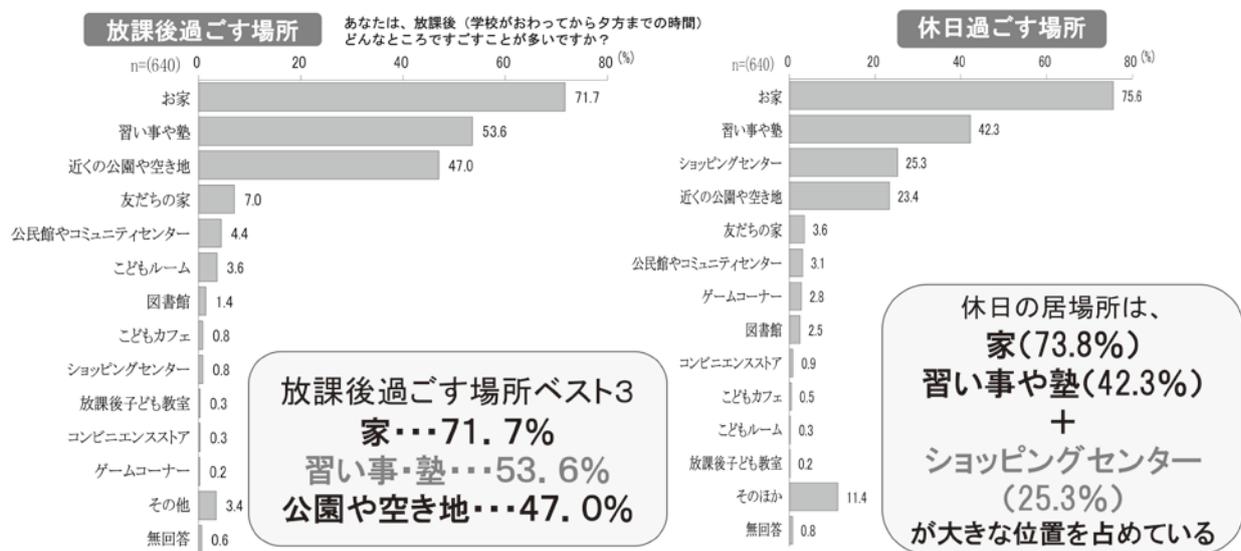


図2 放課後・休日過ごす場所

ルやゲームセンター、ファーストフード店」で過ごす割合には、千葉県では一般層も周辺層や困窮層でも有意な差はなかったが、「一番ほっとできる居場所」について、「ほっとできる居場所はない」と答えた割合が、困窮層（6.9%）が周辺層（3.0%）、一般層（2.7%）に比較して高く、居場所がない子どもが困窮層で多いこと、その傾向は中学生でも同様に見られた（下記図3参照）。さらに実情をみていくと、公園で過ごす割合や学童保育などの利用等については一般層と有意な差は見られないが、「夜遅くまで子どもだけで過ごした」ことが「なかった」の割合が、一般層（83.6%）、周辺層（83.1%）、困窮層（74.1%）となっていた。困窮層では、活動時間のうち2時間以上「ゲーム機で遊ぶ」「スマートフォンをみる」割合も高いことも指摘されており、困窮層の子どもたちが夜遅くまで子どものみで過ごしている実情についても注視する必要性が考えられる。

子どもの自己肯定感については、「自分は価値がある」「自分のことが好き」と思わない割合が、子ども、保護者ともに一般層に比べて困窮層の方が高い。困窮層の小学生については、「不安に感じることもある」「孤独を感じることもある」に同意しない割合が他に比較して低い。不安や孤独を感じやすくなっていることがわかる（次ページ図4を参照）。保護者に対する調査でも、自己肯定感が「困窮層で低い傾向があり、健康状態に問題を抱えている保護者の割合が高い」こと、「悩みを相談できる人がいない割合が高く、家庭内での会話が少ない傾向がある」ことが指摘されている。

日本では、核家族化を背景に日本の家族形態の変化や子育ての文化的・社会的背景も相まって「母子密着」型の子育てが指摘されてきた。下記の結果においても、「楽しいこと・困っていること等を話す頻度」は、全般的に「親」が「学校の友だち」を上回っている。一方で、生活困難度別に比較すると、困窮層の子どもは、「親」と話をする率だけでなく、「友だち」（学校および学校外ともに）、「祖父母」等、多くににおいて話す頻度が低い。「学校の先生、スクールカウンセラー」を頼りにしていることがわかる（次ページ図5参照）。

「こどもカフェ」の子どもたちにおいても、“ケア”のある対話関係を求めている子どもたちの声が多かった。「お母さんと喧嘩した……うるさいから嫌だ」「学校以外でもカウンセラーみたいな人がほしい」「今日は誰もいないの？……一人だから来たの」など、集団に馴染みにくい子どもの気持ちや声を見逃さず、受け止める役割が「居場所」に求められていると実感している。「こどもカフェ」だけでなく、食を通じた支援の場としての「子ども食堂」においても、子どもの権利と遊びを提供する「冒険遊び場（プレーパーク）」においても、さらに、学びの場の提供をする「フリースクール」においても同様にこうした集団に馴染みにくい子どもの気持ちや声を見逃さず受けとめる「居場所」としての役割が展開されている事例がいくつも報告されている。

近年は「子育ての孤立化」も強く指摘され、一方で児童虐待や不適切な養育の報告は増加し続けている。こうした子どもを取り巻く社会的課題を子ども自身で抱えるのは困難である。前にも記したが、い

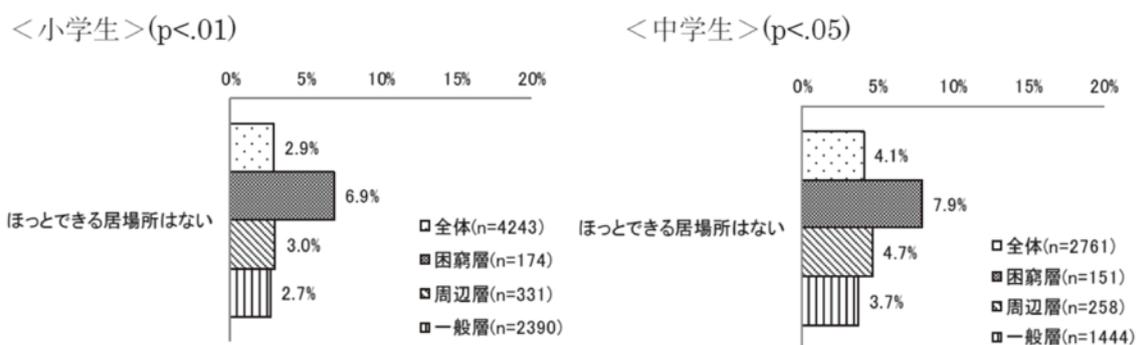


図3 一番ほっとできる居場所はない（生活困難度別） 小学5年生 中学2年生

※ 「ほっとできる居場所はない」を選択した者とそうでない者について、生活困難度による差の検定を実施  
「千葉県子どもの生活実態調査令和元年度版」より引用・転載

自己肯定感 (小学5年生・中学生2年生)  
下記の項目について「思わない」の割合  
(生活困難度別)

自己肯定感 (保護者)  
下記の項目について「思わない」の割合  
(生活困難度別)

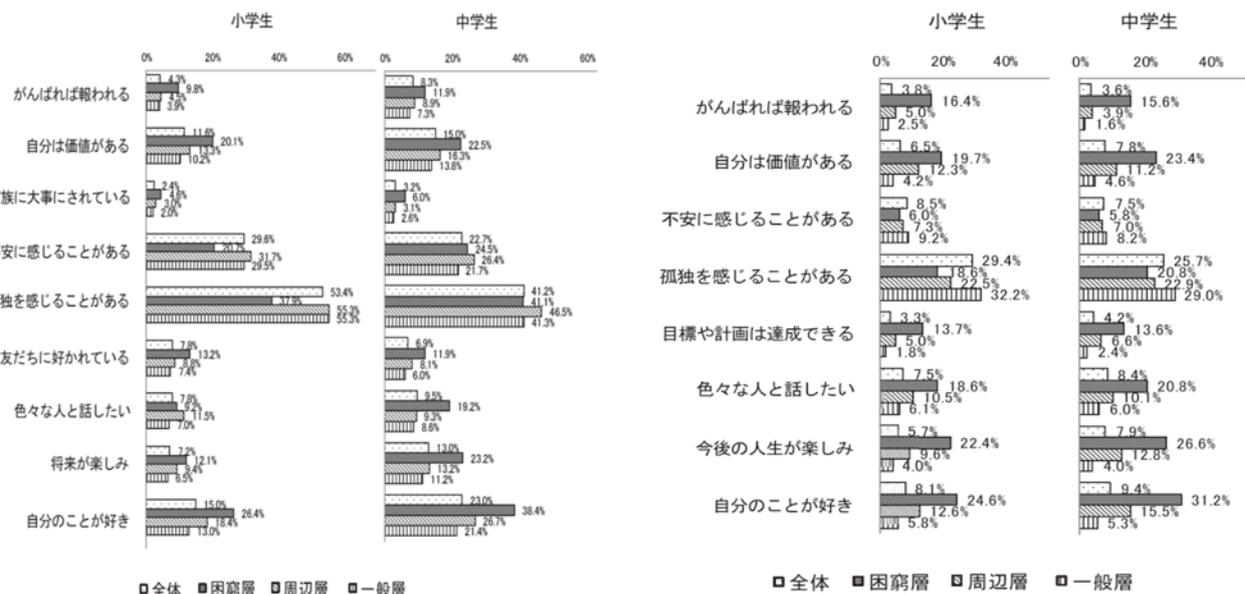


図4 一番ほっとできる居場所はない (生活困難度別) 小学5年生 中学2年生  
「千葉県子どもの生活実態調査<概要版>」令和元年度版より引用・転載

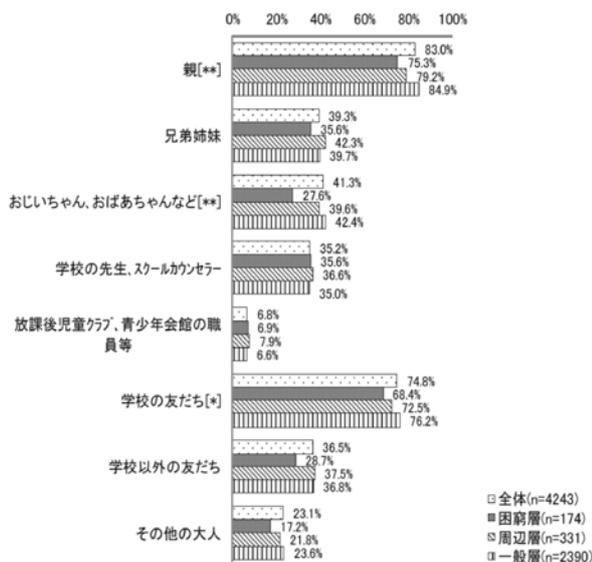


図5 楽しいこと、困っていること等話す頻度 (小学5年生)

「よく話す」+「時々話す」の場合 (生活困難度別)  
「千葉県子どもの生活実態調査令和元年度版」より引用・転載

まの子どもたちは、さまざまな不都合や葛藤に出会いにくい、またそうした状況が見えにくい社会の中で、誰にも理解してもらえないと捉え、SOSを発することができにくい状況にある。「居場所」は、孤独や貧困などの課題を解決だけでなく、さまざまな子どもを取り巻く社会との関係の中で、「すき間」

を機能させる取り組みである。現代の子どもたちを取り巻くさまざまな育成環境の課題を理解しながら、子どもの声を聴き、気持ちを受けとめてくれる人間関係や、信頼と安心のもとに支援の必要性を見極めながら専門的な支援へと繋げていく機能が必要とされている。

## 4 子どもの居場所の機能の検討

### 4.1 「時間」「空間」「仲間」を調整する機能

子どもの居場所の機能について、筆者はこれまでも検討を進めてきた。千葉市における「こどもカフェ」の実践展開を通して把握してきたのは、地域における「居場所」を開設する過程で、筆者自身も把握していなかったようなかたちで、子どもたちが葛藤や圧力の中で生活していることであった。「時間・空間・仲間」の3間が不足しているという指摘があるが、子どもの「居場所」には、失われている「間」を補完する機能があると考えている。

子どもが感じている「忙しさ」の背景に、子どもの居場所が「公園や空き地」から「塾・習い事」に転化せざるを得ない社会的背景がある。地域の中に、子どもも保護者も地域にも理解を得て、安心して送り出せる「場」は、「学校」や「学童保育」な

ど制度的枠組みの中で提供される空間やサービスが中心である。子ども自身が管理された空間から逃れる場合、保護者や大人側の安心と引き換えに、「塾・習い事」という選択肢が出てくる。そこに子どもの「忙しさ」が対になって現れ、保護者には金銭的な負担が増すというジレンマが生じる。

子どもの成育環境において、子ども自身が試行錯誤したり、葛藤を経験することが大切である。一方で、現代の子どもたちはさまざまな不都合や葛藤に出会いにくい、またそうした状況が見えにくい社会の中で育っている。子どもの「非認知能力」を伸ばすという視点からみても、「仲間」による遊びの経験は欠かせないが、必要になる「仲間」は上記で指摘したような「塾・習い事」の忙しさの中で、「学校」以外の場で容易につくることができない状況にある。「こどもカフェ」に来所する子どもたちと「こども会議」実施し、「こどもカフェ」のいいところについてヒヤリングを行ったところ、「友達と集まっていたのしく遊べるところ」「友達をたくさん作れるから」「違う学校の子とかと友達になれる」「いろんな人と仲良くできる」という声が上がっていた。子どもたち自身には、「仲間」の中で育っているようにする潜在的な力が備わっている。現代の家族形態の変化や地域の衰退の中で、意図的に新たな子どもの成育環境を支える展開が求められている。

#### 4.2 集団に馴染みにくい子どもの声を受けとめる

学校と家庭の他に第三の空間は、「子どもの生きづらさ」を把握しやすい場である。子ども自身の社会へのさまざまな不適応が指摘される中で、「不登校」や「いじめ」「自殺」等の課題、またその背景で「子どもの貧困」やさまざまな家族の背景を背負って、大人による管理から逃れてくる子どもの姿もある。「貧困」を解消するには経済的な支援が欠かせないが、一方で、さまざまな背景を背負っている子どもたちはSOSを発することができにくい状況に追い込まれている。「こどもカフェ」でも把握されていた、集団に馴染みにくい気持ちや声は「仲間」には発することができない。一方で、こうした声を身近に受けとめる信頼できる「大人」が、「家族」以外に子どもたちの周囲に存在することが少ない。そこで身近なSNS等を利用して悩み

や声を吐露することで、子どもを犯罪や事故に巻き込んでしまうことも多くなっている。目に見えるような「時間」「空間」「仲間」だけでなく、目に見えない「すき間」を補うこと、現代の子どもたちを取り巻くさまざまな成育環境の課題を理解しながら、子どもの声を聴き、気持ちを受けとめてくれる人間関係や、信頼と安心のもとに支援の必要性を見極めながら専門的な支援へと繋げていく機能が「居場所」に求められている。

前にも記したが、千葉市では子どものSOSをどう理解し、受けとめるのか、広く市民に呼びかけ研修をしている。「居場所」の理解を広げるだけでなく、地域に暮らす大人たちの子どもを見つめるまなざしが変わることがなによりも大切なのである。

#### 4.3 子どもたちを社会につなぐ・つなぎとめる機能

筆者が子どもの居場所の機能について検討を進める中で、実際に「居場所」として展開される取り組みには、上記のような「間」を提供したり、調整したりする機能や、学校や友人、家族や貧困など子どもを取り巻く環境やその背景にある課題からそっと包み込んでくれるような機能とともに、社会に子どもたちをつなぐ、つなぎとめる機能が重要であった。フリースクールや学習支援の場においても、プレーパークや子ども食堂においても、そこには、斎藤（2007）が指摘するように、社会からの逃避や離脱による「一時保護的な空間」ではなく子どもが主体的に社会に歩みだすための「子どもの権利の保障のための空間」としての役割がある。

筆者は、千葉市の「子どもの参画」事業としての「こどものまち」の展開にも協力してきた。子どもたちが「まち」を形成し、「社会」という体験を通して「社会」と施行錯誤しながら関わり合う「市民」としての子どもの姿がある。ある意味「参画」と聞くと積極的な社会プログラムに参加する子どもたちの姿が浮かぶが、実際には「こどものまち」にも、プログラムを「居場所」としている子どもたちが多くいる。実際にドイツ・ミュンヘン市で開催される「ミニ・ミュンヘン」を見学した際、「こどものまち」の中の「図書館」で寝ている子どもの姿があった。ディレクターの方から「あれも市民の姿」と聞いたとき、このプログラムが、子ども（市民）

自身が安心して「ここにいていい」と感じる場であること、そうした姿を含めた社会実装をしている場であることを実感した。

積極的に生きること、参加することばかりが、「社会」ではない。いろいろな子どもたちがいて、そこで自己肯定感や主体性を大切にされることで、安心感や大人への信頼感を得て、その安心感や信頼感を基に、社会とつながることを学んでいく。子どもたちがこうした経験を積むことは、社会とつながる中での危機回避能力やレジリエンスを高めることにもつながると考えている。

## 5 現在の取り組みの展開と今後の課題

現在、千葉市における子どもの居場所事業は新たな展開を見せている。2018年度末で市内2箇所であったモデル事業を終了し、2019年10月から市民ボランティア団体等が開催する子どもの居場所「どこでもこどもカフェ」事業を開始した。現在市内13箇所（2022年1月現在）の居場所が展開している。現在の長いコロナ禍を経て「子どもの自殺率」も増加している。こうした緊急時だからこそ、「居場所」の必要性や役割が期待されている。

並行して、事業所連携・情報共有の会議を年2回実施し、実際的な課題に対応するための事業所研修も実施している。さらに前記にもあるように、地域の人材育成のための「子どもの居場所サポータ養成講座」「子どもSOS支援員養成講座」を実施し、広く市民に呼びかけ、子どもの居場所の必要性と、現代の子どもを取り巻く社会的背景を捉え、子どもの声を受けとめるための研修を実施してきた。

地域コミュニティの再生という視点でもこの取り組みは重要である。人口減少社会において「またこの地域で子育てをしたいと思うか？」と子どもに自信をもって問うことができるだろうか。

これからのこの社会を担うのは、子どもたちである。新たな社会の創造のためには、「脅威」や「不信」ではなく、「市民性、社会性、寛容さ」を育むこ

とができる地域づくりに真剣に取り組み、子どもの主観的福祉を高める努力が欠かせないと考えている。

## 6 倫理的配慮について

アンケート調査結果については2014～2016年度科学研究費助成事業（若手研究（B）「コミュニティを基盤にした子どもの公共空間と子ども施策の検討」において実施したものであり、植草学園短期大学倫理規定に沿って実施した。事例掲載においても、倫理的配慮、個人情報保護の遵守し掲載した。

## 謝辞

最後に、本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝致します。また、本稿をまとめるにあたり、千葉市こども未来部こども未来局こども企画課のご協力にあらためて感謝申し上げます。

## 参考・引用文献

- 斎藤史夫（2007）「子どもの『居場所づくり』の可能性と課題」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第1分冊、哲学東洋哲学心理学社会学教育学第1分冊52. p127.
- 田村光子（2016）「子どもの居場所の機能の検討」『植草学園短期大学研究紀要』第17号, 31-42.
- テス・リッジ（2010）『子どもの貧困と社会的排除』, 桜井書店
- ギル・ヴァレンティン（2009）『子どもの遊び・自律と公共空間』, 明石書店
- 千葉県健康福祉部健康福祉指導課自立支援班（2020）「子どもの生活実態調査報告書 令和元年度版」  
<https://www.pref.chiba.lg.jp/kenshidou/kodomohinkonkeikaku/documents/kodomooskekka.pdf> (2022.1.10参照)
- 千葉県健康福祉部健康福祉指導課自立支援班（2020）「子どもの生活実態調査報告書（概要版）令和元年度」  
<https://www.pref.chiba.lg.jp/kenshidou/kodomohinkonkeikaku/documents/kodomooskekkg.pdf> (2022.1.10参照)
- 東京都福祉保健局「子供の生活実態調査報告書（小中高生等調査）」(2017)  
<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/joho/soshiki/syoushi/syoushi/oshirase/kodomoseikatsujittaityousakekka.html> (2022.1.10参照)
- 内閣府「令和3年 子供の生活状況調査の分析報告書」(2021)  
<https://www8.cao.go.jp/kodomohinkon/chousa/r03/pdf-index.html> (2022.1.15参照)